2-8.三ヶ日みかんの栽培にみる歴史的風致

(1)はじめに

浜松市内では、冬温かく、日当たりの良いなだらかな傾斜地が広がる浜名湖北部を中心にみかんの栽培が行われている。このうち、奥浜名湖地域の浜名区に位置する引佐町奥山地区、細江町小野地区、細江町気賀地区及び三ヶ日町[1]を東西に横断する広域農道は「奥浜名オレンジロード」と呼称される。この路線沿い、細江町から三ヶ日町にかけての区間は、南向き斜面一帯にみかん畑が広がっている。眺望スポットとしても人気があり、みかん畑越しの眼下に広がる浜名湖と起伏に富んだ入江と岬が箱庭的な景観を形成している。

この一帯は「三ヶ日みかん」で有名な全国有数のみかん産地となっている。農林業センサス(平成 27 年)によると、三ヶ日町内の経営耕地面積 1,895.51 ヘクタールのうち 92%が樹園地であり、販売農家のうち 96%が温州みかんを栽培している。歴史的にみても三ヶ日のみかん栽培は享保年間(1716-1736)に山田弥右衛門が紀州から苗を持ち帰り、家の庭先で栽培したのが始まりとされ、三ヶ日におけるみかんの歴史は、三ヶ日の農業の歴史ともいえる。主として斜面を開墾し、段状に切り開いた畑地を利用して栽培が行われ、日当たりの良さなど傾斜地の特性と、水はけの良さなど秩父中古生層の土壌特性を活かした良質なみかんを栽培しており、市場でも高い評価を得ている。こうしたみかんは、戦前は旧国鉄二俣線を利用した鉄道輸送で主に中京圏の市場へ出荷された。現在は、戦後に設立された出荷組合を通じて「三ヶ日みかん」ブランドとして全国に出荷されている。

図2-8-1 浜名湖を眺望するみかん畑

図2-8-2 奥浜名オレンジロード(三ヶ日町)

図2-8-3 浜名湖(猪鼻湖)

図2-8-4 三ヶ日みかん

[1] 昭和 30 年(1955)から平成 19 年(2007)まで、三ヶ日町の「ヶ」の字は大きい「ケ」を用いていたが、本歴史的風致では小さい「ヶ」で統一して表記している。

当地の 300 年にも及ぶみかん栽培の歴史は、浜名湖(猪鼻湖)を臨む傾斜地がみかん畑として開拓されたその景観が体現している。こうしたみかん畑形成の礎となった先人の業績を称えながら、一年を通じた生産活動が行われている。

(2)三ヶ日みかんの歴史

①江戸期以前のみかん栽培

日本には古くから山野でタチバナが自生しており、奈良時代に編纂された万葉集にもタチバナなど柑橘類の名をおりこんだ歌が多く見られる。室町時代の応永 23 年(1416)から文安 5 年(1448)までの朝廷や幕府の出来事を記した『看聞御記』応永 26 年(1419)11 月 26 日の項に「蜜柑」の名称がみられ、小みかん(紀州みかん)のことをあらわしているものと考えられている。静岡県内では、江戸時代の慶長 12 年(1607)ごろ、徳川家康が隠居地の駿府城内に小みかんを植えている。しかしながら、江戸時代前期までに、三ヶ日におけるみかん栽培の記録は伝えられていない。

三ヶ日にみかんが伝来したのは、享保年間(1716-1736)に山田弥右衛門が西国巡礼した際、紀州那智地方から紀州みかんの苗を持ち帰り庭で栽培したことに始まると、大正 11 年(1922)刊行の『静岡県引佐郡誌』が伝えており、山田家が位置する三ヶ日町平山地区を中心に増殖したとある。その後、享和元年(1801)の『大谷近藤家知行石高帳』には、平山地区の山地を開墾して小みかんを植え付け、そこから果実を収穫していた農民を対象に課税した年貢の記載がある。また『静岡県引佐郡誌』には、天保年間(1830-1844)に加藤権兵衛が三河国吉良地方から温州みかんの苗木を導入したことが記されている。明治以降の近代農業の主軸となる、種がなく甘みが強い温州みかんは、江戸時代に三ヶ日の地に伝えられていた。

図2-8-5 三ヶ日みかん発祥の地(三ヶ日町平山)

②明治・大正期のみかん栽培

明治期の三ヶ日みかんは、温州みかんの増殖期であった。明治 35 年(1902)の『静岡県統計書』には、三ヶ日地域を含む引佐郡下のみかん生産状況における種類割合は、「温州七分紀州三分」となっており、温州みかんへの移行が進んでいる状況を確認できる。

大正期は、不況の影響もあり、みかん栽培から畳表や養蚕へ転換する農家が増加するなど、三ヶ日みかんに衰退傾向が見られた時期であった。みかん栽培が衰退した理由は、経済的な混乱、みかん価格低迷と養蚕の好況だけでなく、冬季の寒風による被害と生産技術の未熟、管理不十分に起因していた。

このころ、「開南組柑橘園」が三ヶ日町釣地区に開設された。開南組とは、三井財閥当主の三井高精が出資する一種の土地資源開発事業体で、昭和34年(1959)刊行の『静岡県柑橘史』には大正7年(1918)釣地区の官有地10町歩の払下げを受け、開墾を開始したとある。大正9年(1920)専任技術者として中川宗太郎が着任、地域のみかん栽培者は、はじめて近代的栽培技術の恩恵に浴することとなり、これ以降三ヶ日周辺のみかん栽培は180度の転換と発展をたどり始める。同年秋からは、近辺の荒廃したみかん畑の成木を移植し樹数を増やしていき、大正13年(1924)には開墾後はじめての収穫を得た。中川は、三ヶ日の土地と気候に合ったみかん栽培技術を指導し地域に普及させた。それは「ホソバ(イヌマキ)の防風林」「剪定」「病害虫防除」「土作り」などであり、開南組柑橘園は、今日の柑橘試験場のような機能を果たしていた。また、みかん出荷価格安定のため出荷組合による販売方法を勧め、現在に続く共同出荷が始まった。このような努力の結果、引佐郡における温州みかんの生産量は飛躍的に向上した。

図2-8-6　中川宗太郎と門下生

③昭和前期のみかん栽培

大正後期に中川宗太郎の指導を受けた地域の農家が、三ヶ日に適したみかん栽培に努めた結果、当地のみかん栽培面積と生産量は順調に増加していった。昭和7年(1932)三ヶ日町農会発行『三ヶ日町の柑橘』によれば、町内のみかん栽培面積は概ね200町歩と記されており、その後も順調に栽培が継続されていた。

昭和16年(1941)農地作付統制規則が公布、作付する作物が規定され、浜名湖周辺においても柑橘園を縮小して、供出用の食糧生産に切り替えるよう強制された。当時の様子を、静岡県柑橘試験場の初代場長だった高橋郁郎が記録している。「昭和17年7月、今松治郎氏が、静岡県知事として赴任してくるとともに、筆者に対して、静岡県下1万町歩に近い柑橘園を全部、麦作に転換せしめる計画を作れというバカげた命令が出た。」(昭和34年(1959)刊行『静岡県柑橘史』)。戦時食糧政策による柑橘産業の抑圧は、戦局が進むにつれ、政府や地方行政官から柑橘無用論が唱えられ、柑橘園を麦やさつまいもに転換させるための施策が強制されたが、三ヶ日を含む静岡県下では、多くの柑橘関係者の努力により大量伐採を免れた。

また、三ヶ日を中心とした浜名湖周辺の市町村には陸軍の施設が置かれており、軍需物資の集積地となっていたことから、戦争末期の昭和20年(1945)ごろには爆撃の危険性が高まっていた。そのため、防風対策で設置したみかん畑のコモ(筵)が爆撃の目標になるといわれ、農家はコモ掛けを中止したことで、冬季の「遠州のからっ風」により葉が落葉してしまい、樹勢の衰弱が著しく進行した。

戦時中の三ヶ日みかん栽培は、食糧政策やコモ掛け中止のほか、人手不足、肥料農薬の不

足などのため大きな痛手を被り、生産量は激減の一途をたどりつつ終戦を迎える。

④戦後～現在のみかん栽培

三ヶ日みかんの栽培は、戦時中の物資不足、食糧事情などにより一旦衰退傾向にあった。しかし、戦後の変革により三ヶ日地域の農業を取り巻く環境は激変した。三ヶ日地域でも、昭和 21 年(1946)からスタートした農地改革により、戦前は 46 パーセント程度だった小作農が、５年後には 10 パーセントに減少し自作農(みかん農家)が急速に増加した。

昭和 22 年(1947)青果物等統制令の廃止に伴い青果物の公定価格制が撤廃、昭和 23 年(1948)農業協同組合法が施行され、三ヶ日地域の農業会は農業協同組合に改組された。同年(1948)、市町村の農協を会員として静岡県柑橘販売農業協同組合連合会(のちに静岡県柑橘農業協同組合連合会(略称静柑連))が設立されるとともに、みかん生産農家の増加を追い風に地域特性を取り入れた復興に乗り出した。

終戦直後のみかん生産量は戦前の３分の１程度まで低下したが、昭和 27 年(1952)には戦前と同じ 11,250 トンに達し、価格も安定するなか、経済作物としての位置付けを持つようになった。

ア.柑橘出荷組合や研究会の設立

昭和 20～30 年代のみかんの販売体制は、町内各地区にあった出荷組合、民間の商人、農協そして個人販売と多様な販売形態が存在していた。このころのみかん生産状況は順調に増加しており、昭和 32 年(1957)ごろには戦前の水準を追い抜くほどであったが、みかん生産を指導する組織が町役場、農協、普及所、柑橘研究所、公民館産業部と複数あり、それぞれ独自の指導をしていたこともあり、農家は各組織に振り回されることもあった。そこで、昭和 32 年(1957)三ヶ日町農協に生産委員会が設立され、本委員会が中心となって農家指導していく形となった。

しかしながら、販売面は商人任せであり、生産面で努力し味を良くしても農家がそのメリットを享受できないジレンマがあった。三ヶ日みかんブランドを確立し、市場での販売を伸ばしていくためには、みかんだけを取り扱う専任の販売組織が必要であった。

昭和 35 年(1960)生産者の販売組織である「三ヶ日町柑橘出荷組合」を設立し、農家が生産したみかん全てを共販組織に出荷する体制が整備され、同一品質のみかんが出荷されるようになった。設立当初は三ヶ日地域のみかん生産者 1,200 人のうち 154 人でのスタートであった(令和２年(2020)時点、組合員数 757 人)。揺るがぬ組織体系と規約を基に生産と販売の両立に向けて「生産者自らの手で作り上げる組織」という趣旨は受け継がれ、農協と二人三脚で事業を展開している。

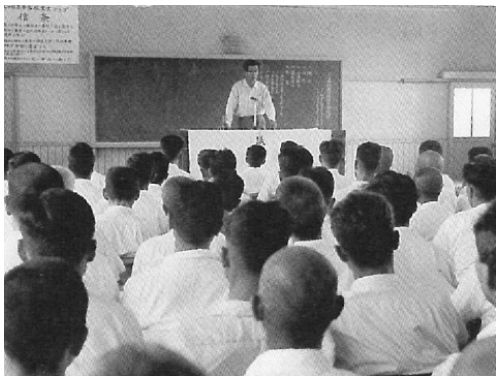

図2-8-7 三ヶ日町柑橘出荷組合設立総会

イ.みかん銘柄産地への発展

昭和 36 年(1961)三ヶ日町農協は東浜名村農協と合併、柑橘出荷組合員数も 665 人と増加し組織が拡大した。以降、順調に組合員数を増やし、昭和 38 年(1963)には 1,019 人、昭和 44 年(1969)には 1,339 人まで増加した。大量のみかん受け入れ態勢整備と選別の機能強化が必要となり、設立時の選果場であった国鉄二俣線三ヶ日駅前四番倉庫から、昭和 40 年(1960)オートメーション柑橘出荷システムを導入した選果場が三ヶ日町農協に設置された。その後、昭和 47 年(1972)三ヶ日町が「農村施設等総合整備事業」の指定地区となったことから、その主要事業の一つとして総床面積約 12,000 平方メートルのマンモス選果場を整備した。

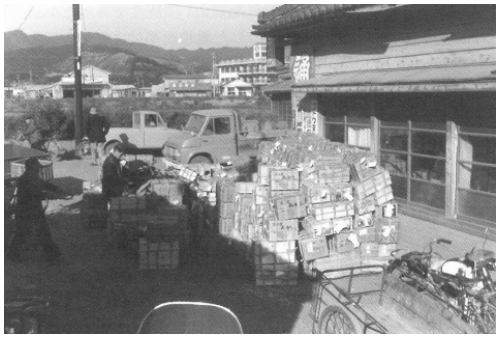

図2-8-8 駅前四番倉庫での出荷風景

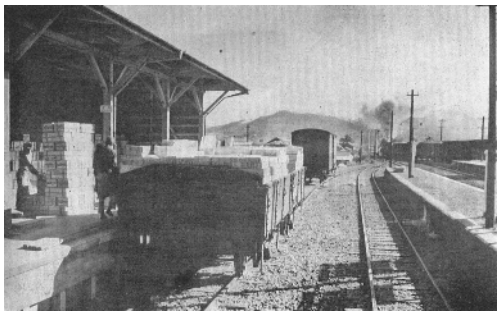

図2-8-9 みかんの出荷(昭和 36 年(1961))

図2-8-10 三ヶ日農協選果場竣工式

販売面でも、輸入農作物の日本市場への進出や日本経済の発展によるグルメ時代到来にあっても生き残れる三ヶ日みかんブランドを確立するため、昭和 54 年(1979)イメージキャラクターの導入を決定した。元気な子供が大きなみかんを抱えたキャラクター「ミカちゃん」が誕生し、宣伝活動が活性化された。さらに、高付加価値のブランド商品の開発に取り組み、昭和 59 年(1984)三ヶ日みかんのエースとして糖度・外観が厳しく選別された最高級品「ミカエース」が登場した。「ミカちゃん」誕生と「ミカエース」販売により、これまで以上に他の産地との差別化が図られ、三ヶ日の産地イメージが形成され、三ヶ日みかんのブランド力が向上した。

また、三ヶ日みかんは、その成分であるβクリプトキサンチン[1]により、生鮮食品としては初の機能性表示食品として受理され、令和２年(2020)には、GABA[2]の機能性も受理されたことで、生鮮食品としてW表示がされている。これも日本では初めての事例となっている。

図2-8-11 ブランドマーク

図2-8-12 ミカエース

図2-8-13 ミカちゃん

[1] 柑橘類特有のオレンジ色の色素成分。強い抗酸化作用を持っている。
[2] γ(ガンマ)－アミノ酪酸というアミノ酸の一種。抗ストレス作用がある。

ウ.三ヶ日みかんの品種

現在、三ヶ日町内では、天保年間(1830－1844)に加藤権兵衛が三河から伝えた温州みかんを中心とした栽培を行っている。温州みかんは、生育速度や収穫時期などから品種が大別され、生育及び出荷が早い順に、極早生温州・早生温州・普通温州・晩生温州と区分される。戦前から早生と普通が栽培されていたが、昭和40年(1965)からは晩生温州の「青島」を将来の三ヶ日の顔と位置付け、同年の12ヘクタールの植栽に始まり、その後も町内各地で植栽が進められた。「青島」は晩熟(収穫後貯蔵するほど甘みが増す性質)で、年内に収穫して貯蔵し、12月から3月に出荷する品種である。糖度が高くコクと深い甘味のバランスが整っていることから消費者の人気が高く、平成元年(1989)には10,000トン超を出荷するに至り、現在も主力品種となっている。現在、「早生(興津・宮川)」「晩生(青島)」「晩柑類(ネーブル・清見・ポンカン)」などが栽培されている。このうち「早生」「青島」で「ミカエース」ブランドが販売されている。

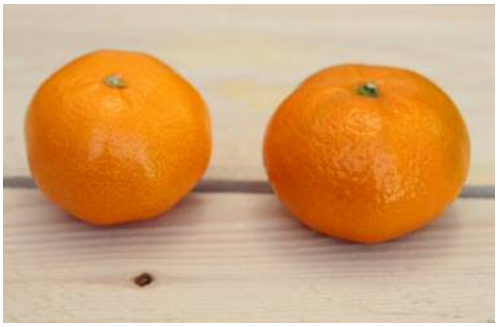

図2-8-14 早生(左)・青島(右)

エ.現在の樹園地の形成

巨大な地域産業としてのみかん栽培は、大正7年(1918)開南組柑橘園の開墾により礎が築かれた。戦中から終戦直後の衰退期を経て、昭和25年(1950)静岡県柑橘試験場三ヶ日母樹園が開南組柑橘園跡地に開設されるなど、全国的な柑橘類の生産増強の潮流とともに、大規模なみかん農園経営への基盤を固めていった。

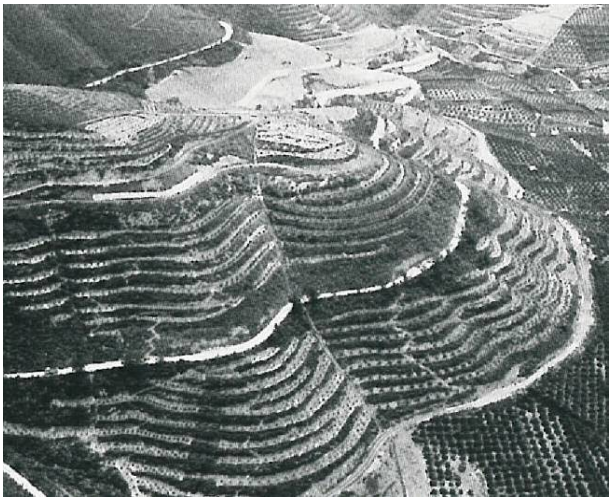

図2-8-15 美しい曲線を描き出すみかん畑造成

現在の樹園地の形成については、昭和32年(1957)、三ヶ日町を含む浜名湖周辺の1市7町村により設立された「西遠柑橘開発協議会」の国有林払下げによるみかん産地づくりが端緒となった。第1次開発計画を昭和37年(1962)に、第2次開発計画を昭和42年(1967)に達成し、三ヶ日町内では第1次開園で359ヘクタール、第2次開園で356.3ヘクタールのみかん畑が整備された。また、昭和40年(1965)から46年(1971)まで、大規模な土地改良によってみかん畑が造成された。国営・県営開拓パイロット事業、国営農地開発事業が次々と行われ、三ヶ日町では合計4団地で237ヘクタールに及ぶみかん畑の造成となった。これらの造成事業により、今日のみかん畑が形成され、三ヶ日みかんの生産基盤が整備された。

(3)三ヶ日みかんの栽培に関連する建造物

①みかん畑と石垣

三ヶ日みかんの畑は、その多くが斜面地に開かれ眼下に浜名湖を臨むことができ、浜名湖と一体となった良好な景観を形成している。明治初頭から農家による植樹が行われ拡大してきたみかん畑に、今日のような景観が形作られた原点は開南組柑橘園にある。当時、浜名湖周辺地域では冬の強烈な西風が樹園地に被害を及ぼしていたことから、防寒を兼ねた防風対策が急務であった。大正９年(1920)同園に着任した中川宗太郎は、その対策としてホソバ(イヌマキ)の防風林を設置するとともに地域の農家にその必要性を説いて回り、今日見られる防風林が並列するみかん畑景観形成の基盤を築いた。

その後、昭和 30 年代から昭和 46 年(1971)にかけて、国営・県営開拓パイロット事業などの大規模な農用地開発事業により斜面地にみかん畑が造成された。この時期に造成されたみかん畑は、等高線に沿って階段状に築かれており、山頂には保水林を造成し水源涵養林とするとともに、表土の流出や法面の崩れ防止対策のため石垣が設けられた。石垣には地元で産出する石灰岩などを用いており、緑色のみかんの木と白く帯状に伸びる石垣が地域特有のみかん畑景観を形成している。

浜名湖に面した斜面を開墾したみかん畑でのみかん生産は、なだらかな傾斜地が多いため日当たりが良く、また風通しや水はけも良いため、みかんの品質に良い影響を与えている。「遠州のからっ風」と呼ばれる冬の強い西風から、みかんの木を守るための防風林と稜線沿いの保水林が整然と並び、農道でつながれているみかん畑では、年間を通してみかん生産に関わる活動が行われている。

図2-8-16　ホソバ(イヌマキ)の防風林

図2-8-17　石灰岩の石垣

図2-8-18　斜面を開墾したみかん畑

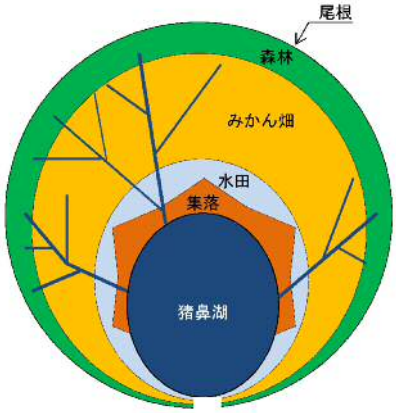

図2-8-19　三ヶ日町の環境特性模式図

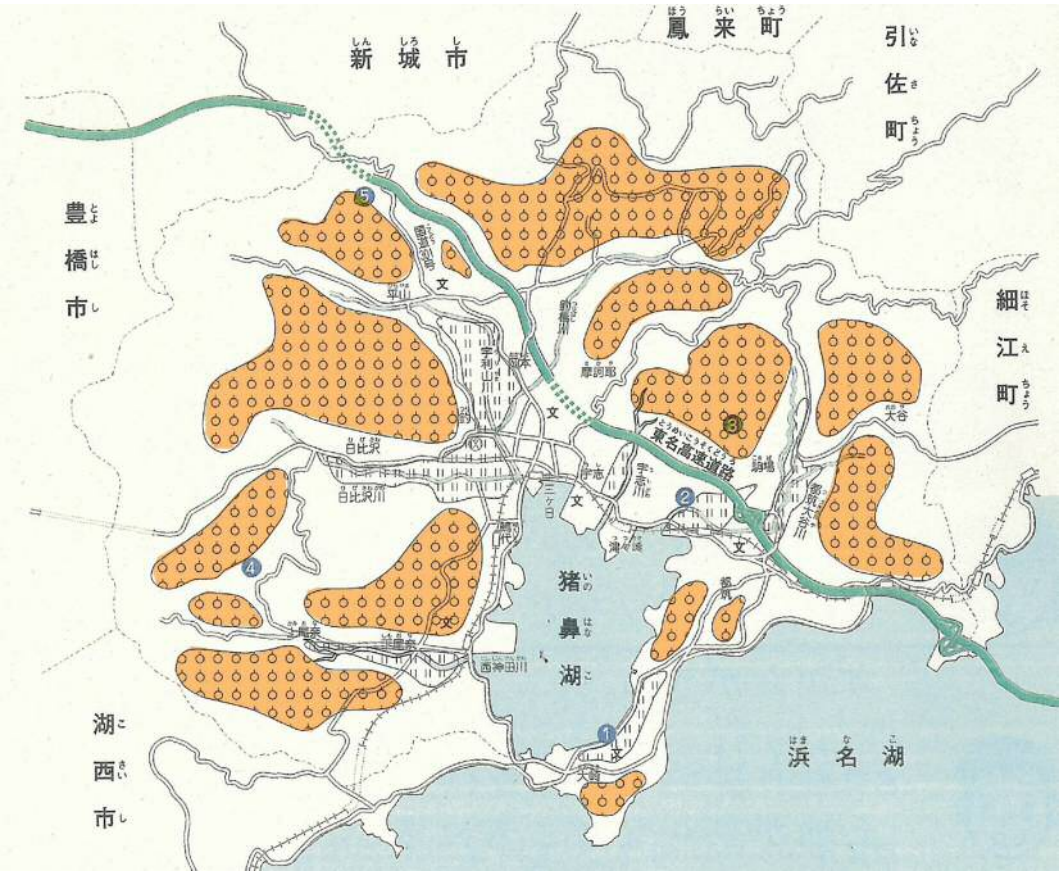

図2-8-20 みかん畑の広がり(出典『小学3・4年生社会科副読本 わたしたちの町 三ヶ日』平成 14 年(2002))

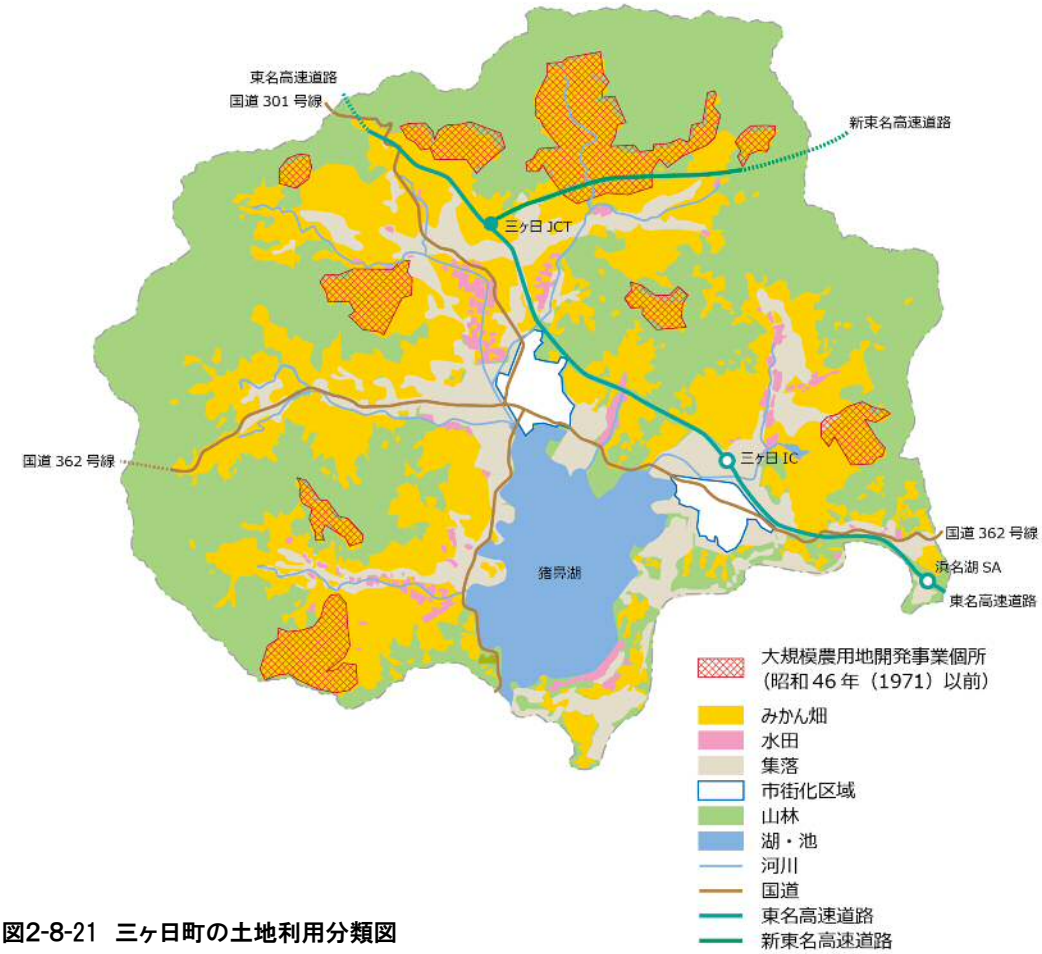

図2-8-21 三ヶ日町の土地利用分類図

②みかんの生産・出荷などに関係する建造物

三ヶ日町内には昭和 20～30 年代にかけて建設された、みかんの生産・出荷に関わる建造物が現存・使用されており、みかんの生産・出荷の歴史を示すものとなっている。

ア.三ヶ日町農協会館

三ヶ日町三ヶ日地区に所在し、三ヶ日町農協本館として現在も用いられている。昭和 37 年(1962)の建築。鉄筋コンクリート造 3 階建、延床面積 1,359.6 平方メートル(その後増築、現在は延床面積 1,460.53 平方メートル)。建物に付属した三ヶ日みかんのモニュメントがアイストップとなっている。

図2-8-22 三ヶ日町農協会館

イ.三ヶ日町農協柑橘選果場

三ヶ日町農協会館の西に位置し国道 301 号線に南面して建つ。昭和 40 年(1965)の建築。軽量鉄骨造平屋建、スレート葺、延床面積 3,129 平方メートル(その後増築、現在は延床面積 5,325.86 平方メートル)。農家から運び込まれたみかんは、この選果場で光センサーにより仕分けられ、等級・階級ごとに箱詰めされる。建物前面に掲げられたミカちゃんマークと「みかんの里 Ⓜ 三ヶ日みかん」の表示が国道を通る人々に三ヶ日みかんブランドをアピールしている。

図2-8-23 三ヶ日町農協柑橘選果場

ウ.奥平山振興会館

三ヶ日町平山の奥平山地区の中心部に、木造平屋建、寄棟造、瓦葺の「奥平山振興会館」が所在する。建設年は詳らかでないが、『平山の民俗　東京女子大学民俗調査団 1989 年度調査報告』(平成 2 年(1990))によると、奥平山地区全戸が加入する奥平山振興会が立ち上がった昭和 31 年(1956)には、作業場と倉庫を兼用する集会施設として用いられていたことが分かっている。当時から農休日の映画鑑賞やみかん栽培の肥料配合勉強会など多くの行事・活動が行われており、現在でもみかん生産に携わる農家の各種会合に利用されている。

図2-8-24 奥平山振興会館

エ.時計台

みかん畑が広がる大福寺地区の辻に位置する「時計台」は昭和５年(1930)建立の銘が刻まれている。地上高約 2.6 メートル、コンクリート製、東面を向いて建つ(基礎を除く本体部高さ約 1.95 メートル、幅約 0.6 メートル、奥行約 0.25 メートル)。中央やや上方の地上高約 1.85 メートル付近に円形時計を嵌める。みかん畑への街道が交差する辻に設置され、農作業のため通行する農家が時間を確認する。

図2-8-25 時計台

③みかんの顕彰に関係する建造物

ア.柑橘頌徳碑

三ヶ日みかんの発展に尽くした３大恩人「山田弥右衛門」「加藤権兵衛」「中川宗太郎」の偉業を後世に残すため、昭和 38 年(1963)三ヶ日市街地と浜名湖を見渡す稲荷山公園に「柑橘頌徳碑」が建立された(刻銘による)。碑文は、静岡県柑橘試験場長だった農学者の田中輸一郎(1901-1983)の筆によるもので、裏面の撰文は戦前三ヶ日町農会に勤務し、戦後静岡県農業会技師として浜名湖周辺のみかん発展に尽力した山岡照平(1911-1995)によって撰された。撰文には『今や三ヶ日町一帯は名実共に蜜柑の町となり巨額にのぼる蜜柑の富が経済の柱となって更に大きな発展を遂げようとしている。この隆盛は二世紀に亘る先人の努力と次に掲げる人達の偉大な功績の賜物であることを忘れてはならない。』と刻まれている。

図2-8-26 柑橘頌徳碑

イ.山田弥右衛門家墓所(三ヶ日みかん発祥の地)

３大恩人うち、三ヶ日出身の「山田弥右衛門」は、三ヶ日町平山地内に墓所が建立されている。江戸時代にみかん栽培が始められた山田家屋敷地の庭前に、21 基の石塔が建つ。三ヶ日の地にみかんを持ち込んだ山田弥右衛門のものと伝えられる石塔をはじめ建立年の刻銘が確認できないものもあるが、明治 32 年(1899)から 44 年(1911)建立と刻まれた石塔が４基あることから、このころには墓所として整備されていたことが分かる。墓所の入口には「三ヶ日みかん発祥地」の解説看板が設置され

図2-8-27 山田弥右衛門家墓所

るなど、山田家の子孫だけでなく、郷土学習で小学生が訪れるなど、三ヶ日みかんに関係する地域の人々が今なお顕彰し続けている。

ウ.加藤権兵衛家墓所（温州みかん発祥の地）

同じく、三ヶ日出身の３大恩人のうち、温州みかんを当地に持ち込んだ「加藤権兵衛」家の墓所が三ヶ日町平山地内に建立されている。主屋やみかん倉庫が建つ加藤家屋敷地の庭前に９基の石塔が建ち並ぶ。天保 11 年(1840)建立と伝えられている加藤権兵衛の石塔のほか、弘化４年(1847)や嘉永元年(1848)と刻まれている石塔があることから、幕末には墓所が造営されていたことが分かる。地域の人々が今なお顕彰し続けており、収穫・出荷の時期には三ヶ日みかんが墓前に供えられる。

図2-8-28　加藤権兵衛家墓所

エ.共開園記念碑

三ヶ日町内には大規模開拓の完了を記念した石碑が建立されている。長根地区には、大正６年(1917)から大正 12 年(1923)まで７年の歳月をかけて完成させた国有林開墾を記念した「共開園記念碑」が、昭和 37 年(1962)に建てられている。「姫松を黄金なる樹にきりかえて　名も福長と世に残るらん」の碑文が表に刻まれ、裏には開園当時の区長はじめ組合員役員の名及び記念碑の建立年を含む事業経過が刻まれている。

図2-8-29　共開園記念碑

オ. 開墾記念碑

只木地区には、昭和 16 年(1941)に竣工した開墾事業を記念した「開墾記念碑」が建てられている。高さ約 2.25 メートル、幅約 0.9 メートルで、みかん畑の入口に南面して建つ。背面には、開墾事業の経過と関係者の氏名が、昭和 17 年(1942) ３月の建立年月とともに刻まれている。

図2-8-30　開墾記念碑

カ. 開拓記念碑

昭和41年(1966)に着手された県営開拓パイロット事業三ヶ日第２地区(下尾奈・上尾奈地区)の竣工を記念して、事業地区内に「開拓記念碑」が建てられている。高さ約2.7メートル、幅約0.9メートルで、造成されたみかん畑に囲まれた山頂に建つ。昭和45年(1970)６月１日発行の『広報みっかび』に「幾何模様に美しい開畑山の上までのびる農道」の見出しで、階段式みかん畑のほか農道整備や記念碑の建立などの事業が昭和44年度末(昭和45年(1970)3月)に完了したことが報告されている。

図2-8-31 開拓記念碑

キ.旧三ヶ日小学校大福寺分教場(みかんの里資料館)

周囲をみかん畑に囲まれた福長地区に所在する「旧三ヶ日小学校大福寺分教場」は、現在、三ヶ日みかんの歴史や栽培方法などを展示し、みかんや農業に関する講座を行う「みかんの里資料館」として活用されている。木造平屋建、瓦葺、延床面積256.14平方メートルの「旧三ヶ日小学校大福寺分教場」は、学校誌により昭和26年(1951)に建築されたことが分かっている。教室は１年生と２年生だけの２つで、昭和30年(1955)の町村合併により三ヶ日町立西小学校大福寺分校と改称された。昭和32年(1957)発行の三ヶ日町勢要覧に町立西小学校大福寺分校の名称で写真が掲載されている。運動場を臨む南側に教室、北側に廊下が配されている。５月ごろ、周りのみかん畑では一斉に白い花が咲き誇り、初夏の陽気に窓を開けると、建物内にみかんの花の匂いが香り立つ。

図2-8-32 旧三ヶ日小学校大福寺分教場
(みかんの里資料館)

図2-8-33 大福寺分校(昭和32年(1957))

(4)三ヶ日みかんの栽培に関連する活動

①生産と出荷

三ヶ日町一帯は、南斜面の丘陵地で日照量が多く年平均気温約16℃と温暖な気候で、みかん栽培に適した自然条件であること、保肥力が低く肥料コントロールがし易いことや、耕す部分の土の層が浅く排水性が良いという土壌などを生かし、全国を代表するみかん産地となった。地元で産出する石灰岩の石垣が積まれたみかん畑が広がり、そのなかには近代以降の開墾の歴史を刻む共開園記念碑などの石碑が建てられている。

図2-8-34　みかん畑

図2-8-35　みかん畑に囲まれた集落（奥平山）

みかん畑では１年を通して様々な仕事が行われる。特に秋～冬は、収穫作業のため多くの人々がみかん畑に集まり、収穫したみかんを搭載した農家のトラックが石垣や石碑の前を頻繁に往来する。また、奥平山振興会館をはじめ地域の集会場や三ヶ日町農協会館などの施設では、生産者であるみかん農家の会合や生産出荷団体の座談会も行われる。三ヶ日は、その土地に最も適した作物を見出し、意欲的な産地組織によって理想的な生産管理と出荷を実現することで、三ヶ日みかんの歴史の継承とブランド力の向上に寄与している。

ア.春　～剪定～

みかんは、年中葉をつけており、春になり気温が高くなると新しい芽が発生し、次第に葉が開き、小さなつぼみが見えはじめる。この新芽が出る前に、伸びすぎた枝や余分な枝を切る「剪定」を行う。枝を切ることで太陽の光がまんべんなく葉に当たるようにし、花の量をコントロールして毎年同じように花が咲き、実が付くようにする。みかんの花は前年に生えた枝につき、実が成るため、その枝を切りすぎないようにし、翌年のために新しい芽を育てる。この作業は、異常気象に耐える強い木の育成を考えて切るため、専門的な技術が必要になる。１本１本慎重に行うため労力が必要になるが、おいしいみかんを育てるためには大変重要な作業となる。また、三ヶ日で最初に剪定が行われたのは大正期にさかのぼる。３大恩人の１人中川宗太

図2-8-36　剪定

図2-8-37　開花

郎の指導によるもので「剪定なくしてみかんなし」と言われるほど地域に浸透していった。剪定の普及が農家の栽培意欲を向上させ、集団みかん園の誕生につながり産地化への胎動となった。５月上～中旬になると、大きく成長したつぼみが開き、５枚の花びらのなかから良い香りが漂い、瑞々しい初夏の匂いが三ヶ日の町を包み込む。

イ.夏　～摘果、灌水、防除～

a.摘果

図2-8-38　摘果

みかんの花がしぼんだあと、緑色の小さな実ができる。１本の木に実が多すぎると大きく育たず、木が疲れて翌年の実が少なくなってしまう。そこで、傷や病気がなく、大きすぎず小さすぎない実を残して、あとは摘み取っていく。これを「摘果」といい、みかんの実が大きくなって色づくまで繰り返し行う。暑い季節に、全てのみかんの木の１つ１つの実を見比べながら摘んでいくのは根気のいる作業だが、大きさの揃ったおいしいみかんを、毎年同じように栽培するためには欠かせない作業である。

昭和 40 年代に入ると、全国的にみかんの生産量が増える一方みかんの消費が減少傾向となり、作れば売れた時代から、売れるものを作る時代となった。そこで三ヶ日みかん生き残りのため、作りすぎず、「量より質」のおいしいみかんのみを作ることが必要となり、摘果が最重点作業となった。三ヶ日町農協では「摘果大作戦」と銘打ち、職員全員が摘果を手伝い、技術員が真夏のみかん園を回って指導するなど、摘果の実行を徹底した。農協と農家が一丸となって摘果に取り組むことで、おいしい三ヶ日みかんづくりが定着していった。

b.灌水

図2-8-39　灌水

みかん作りで大切なのは日照時間で、特に、８月から 10 月にかけての日照が重要となる。水不足になるくらいの土地がおいしいみかん栽培の適地といわれているが、８月のみかんが大きくなる時期に水分が不足すると生育が悪くなるため、雨が少ないときは水を与える。ただし、与えすぎても甘みが減ったり、木が乾燥に弱くなったりするので少なめに与えるが、収穫後はたっぷり水を与える。この水やりのことを「灌水」という。かつては、沢水を引いたり、貯水槽などの水を桶で担いで運んだり、長い間干ばつへの不安と水の悩みを抱えていた。平成元年(1989)、「湖北用水」の国営事業が完了し、三ヶ日地域のみかん畑まで用水が引かれ、作業量が大きく軽減された。

c.防除

果実だけでなく葉、幹、根に虫や菌がついて生育に影響を及ぼすことから、病害虫を予防・駆除するため農薬をまいて消毒する。これを「防除」という。病害虫の発生にあわせ年９回程度農薬を散布する。

以前は、みかんの木１本１本噴霧する過酷な仕事だったため、昭和 40 年(1965)から安全に効率よく行うヘリコプターによる空中散布も試されたが、十分な効果が得られなかった。そこで、昭和 55 年(1980)三ヶ日では全国のみかん産地のなかで一早く「ＳＳ」(スピードスプレーヤー)を導入。これまで３人で２日かかった作業が、ＳＳによって１人で１日となり、薬剤量や防除コストを大きく減らすなど防除作業の省力化が達成された。また、ＳＳを通すため木と木の間を開けて通路を整備することにより、防除以外のあらゆる作業も楽になった。さらに、光が多く当たるようになり品質向上にも役立つなど、ＳＳ導入はみかん栽培を革新的に変革した。

図2-8-40　防除　ヘリコプターによる空中散布(昭和 40 年(1965))

図2-8-41　防除　SS(スピードスプレーヤー)

ウ.秋・冬　～収穫、運搬、貯蔵、選果と出荷～

a.収穫

開花から約 180 日で、みかんの収穫が始まる。早生みかんは 10 月中旬～11 月中旬、青島みかんは 11 月中旬～12 月中旬が収穫期となる。みかんは傷がつくと痛むため、収穫は今も昔も手作業で行う。まず、実から１センチメートルほどのところで枝から切り、実を傷めないようにもう１度果実ギリギリのところでヘタを切る「２度切り」という方法で丁寧に採っていく。１本の木から 500～600 個、１日に１人当たり約 500 キログラム収穫する。11～12 月は最盛期となり、「切子さん」と呼ばれる採集援農者が収穫を手伝う。昭和 40～50 年代には、何十台ものバス(援農バス)で切子さんが三ヶ日にきていた。現在でも切子さんは三ヶ日みかん収穫の貴重な人材であり、遠くは東北地方から駆けつけてくれる。

図2-8-42　収穫

図2-8-43　切子さん(昭和初期)

b.運搬

かつて、摘み取ったみかんは、リヤカーや大八車などに集めて家まで運んでいたが、みかん畑は傾斜地が多く、斜面を往復するのは大変な重労働だった。この運搬作業を省力化するため、昭和40年代には「モノレール」など軌道式運搬機が普及していった。現在では、園内路が整備され、自走式運搬車「クローラー」で搬出でき、作業能率は格段に向上した。

図2-8-44 運搬

収穫期には、みかんのコンテナが積まれたトラックが頻繁に町内を往来しており、大福寺の辻では停車するトラックが時計台で時間を確認する。

c.貯蔵

収穫したみかんは出荷までのあいだ、「ロジ」と呼ばれる木箱に入れて倉庫に貯蔵する。収穫の時期は、早朝からみかんを切り、夕方になると家へ運び、夜にはロジにきれいに並べ入れるなど、早朝から深夜までの作業が続く。

図2-8-45 貯蔵

早生みかんは皮が薄く長期の保存には向かないため、色のついたものから収穫し、５日ほど貯蔵してから出荷する。10 月中旬～11 月中旬に収穫し、12 月中旬までには出荷を終えるため、貯蔵は長くても１か月である。

青島みかんは日持ちがとても良いのが特徴で、11 月中旬～12 月中旬に収穫してから３月中旬まで、長いものは３か月もの間貯蔵する。果実の成熟が着色より早く進むため、８分程度の着色状態から収穫し、徐々に色がつき、酸味が減って甘みが増すのを待つ。貯蔵しながら完熟させるため、木を十分休ませることもできる。

現在は、貯蔵の前に１～２週間ほど強制的に風を当てて余分な水分を取る「余措」という技術で、数ヶ月たってももぎたてのような瑞々しさを保たせている。余措から貯蔵にかけての一連の作業は、長年の経験と勘を要する匠の技である。

d.選果と出荷

貯蔵されおいしくなったみかんは、農家で選果してから出荷する。選果台に乗せ、傷や腐りがないか、色づきが良いか丁寧に調べ、大きさや外観などで選別してコンテナに詰め、三ヶ日町農協柑橘選果場に運ばれる。

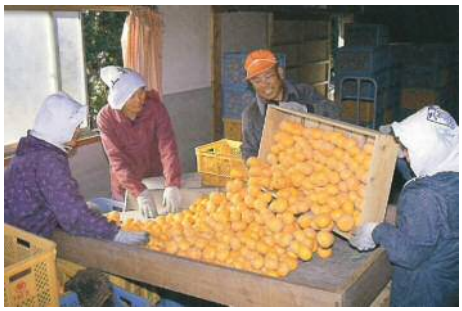
図2-8-46 家庭選果

運び込まれたみかんは、光センサーによって、大き

さ・外観・内容ごとに仕分けられたあと、等級・階級ごとに段ボールに詰められ、各地の青果市場などに運ばれる。三ヶ日の選果場は、昭和36年(1961)全国に先駆けてオートメーションシステムを導入した。現在は光センサーで味の測定ができる最新鋭の機械を備え、1時間に70トンを選別し、質の揃ったみかんを1日平均450トン、10キログラム入り段ボール 45,000 箱分出荷できる全国有数の選果場となっている。

図2-8-47 選果場(1次選別)

また、出荷は昭和35年(1960)設立された三ヶ日町柑橘出荷組合が全量を引き受けている。

図2-8-48 選果場(等階級別選別)

みかん作りに励む生産者の熱い思いを基盤に、農協が優良品種「青島」への転換、大型選果場の整備、プロモーション活動など適切な対策を次々と講じ、それを卓抜した組織力で出荷組合が自主的かつ確実に実行していくなど、出荷組合と農協が二人三脚の産地強化に努めることで、甘くておいしい高品質な「Ⓜ(マルエム)三ヶ日みかん」ブランドを継承している。

e.寒冷紗(防風対策)

三ヶ日は温暖な気候に恵まれ、みかん栽培には絶好の環境となっている。しかしながら、厳冬期(1～2月)には、「遠州のからっ風」とよばれる冷たい西風が強く吹く。防風対策をしないと葉が吹き飛ばされ、栽培の致命傷となるため、マキの防風林を設置するほか、木を1本ごと寒冷紗で包む、いわゆるコモ掛け作業が行われている。かつては、藁や漁網を用いていたが、現在では寒冷紗を用いており作業が省力化されている。この時期には、寒冷紗のかかったみかん畑が広がる。

図2-8-49 寒冷紗(防風対策)

図2-8-50 寒冷紗のかかったみかん畑

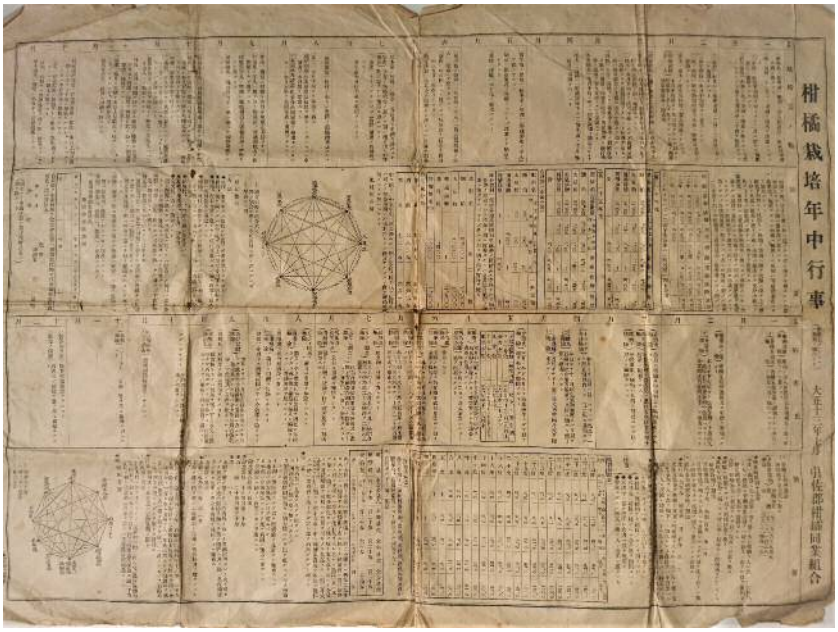

図2-8-51　昔のみかん作りカレンダー『柑橘栽培年中行事（大正 13 年）』

表2-8-1　みかんの栽培ごよみ

	病害虫防除	肥料	摘果	収穫	貯蔵	出荷	その他	みかんの1年
3月		春肥			貯蔵	青島みかん	剪定	
4月							接ぎ木	●枝先から新芽が伸び始める
5月		夏肥					摘蕾	●芽が伸び、葉が開き始める ●白い花が咲く
6月							草刈り	●花が散り、小さな実が見える ●生理落下
7月								●実が大きくなっていく ●実のない枝から夏枝が伸びる
8月							灌水	
9月			摘果				マルチシート	●早生みかんが色づく
10月							枝つり	●秋枝が伸び始める ●早生みかんが成熟
11月		秋肥		収穫		早生みかん		●青島みかんが色づく ●青島みかんが成熟
12月								●花芽の形成
1月					貯蔵	青島みかん	灌水 寒冷紗	
2月							土つくり	

エ.販売

三ヶ日町内では、常設店舗である「ＪＡみっかび特産品直売所」や臨時の産地直売所・みかん狩り園である「カネカみかん狩り園」などでの販売風景を目にすることができる。早生みかんの収穫時以降、のぼり旗が町内にはためくことで、みかんシーズンの到来を感じることができる。これまでも、観光農園でのみかん狩り体験のほか、「三ヶ日みかん　青島みかんジュース」、「青島みかんゼリー」、「青島三ヶ日みかんキャンディー」、「みかん和菓子」などに代表される飲料やお菓子、「三ヶ日みかんそうめん」など、みかんを利用した加工品などの商品開発を推進しており、ブランド力の向上を図っている。

図2-8-52　みかん販売とみかん狩り

図2-8-53　加工品

また、平成 19 年(2007)地域団体商標に登録された「三ヶ日みかん」の名称は、戦前にまでさかのぼる。昭和 43 年(1968)三ヶ日町農業協同組合柑橘部発行『三ヶ日ミカンの由来と販売の移り変わり』によれば、昭和６年(1931)春、浜松市で開かれた全国産業博覧会に出品したのを機に全国的に宣伝しようと名付けられ、「色よい味よい日持ちよい三ヶ日みかん」のキャッチフレーズとともに周知されていった。

表2-8-2　三ヶ日町内の主なみかん販売所・みかん狩り園

No.	名称	場所
①	JAみっかび特産品直売所	三ヶ日 町 三ヶ日
②	みかん工房	三ヶ日 町 三ヶ日
③	つづさき観光みかん直売所	三ヶ日 町 宇志
④	つづさき観光農園	三ヶ日 町 津々崎
⑤	マルカワ観光農園	三ヶ日 町 津々崎
⑥	カネカみかん狩り園	三ヶ日 町 下尾奈
⑦	髙平農園直売所	三ヶ日 町 下尾奈
⑧	マルウ外山農園	三ヶ日 町 下尾奈
⑨	おみやげ勝美センター	三ヶ日 町 都筑
⑩	おやじのみかん小屋	三ヶ日 町 都筑
⑪	マル十石田農園	三ヶ日 町 大崎
⑫	咲夢茶屋	三ヶ日 町 佐久米
⑬	まるや青果	三ヶ日 町 佐久米
⑭	JAみっかび特産センター	三ヶ日 町 駒場

②顕彰・普及啓発

ア.柑橘頌徳祭

三ヶ日みかんの発展に尽くした「山田弥右衛門」、「加藤権兵衛」、「中川宗太郎」に感謝する記念碑「柑橘頌徳碑」が、三ヶ日市街地と浜名湖を見渡せる稲荷山公園に建てられている。この３人の先見性と人徳、栽培指導への貢献が記念碑建立に結びつき、三ヶ日みかんの３大恩人として現在も顕彰されている。

図2-8-54 柑橘頌徳祭

本格的な三ヶ日みかんシーズン到来前の 10 月下旬～11 月に「柑橘頌徳祭」が行われる。昭和 40 年(1960)11 月 15 日発行の『広報みっかび(第 132 号)』お知らせ欄に「11 月 20 日　柑橘頌徳祭会場三ヶ日公園(柑橘頌徳碑)」とあることから、頌徳碑が建立された昭和 38 年(1963)直後から行われていたことが分かる。３大恩人への感謝とみかん産業の更なる発展を祈り、３大恩人の子孫と生産・出荷・販売などの関係者が集い、式典が催される。浜名惣社神明宮宮司による祓いや祝詞の奏上、参列者による玉串奉奠などが行われ、３大恩人が端緒となった三ヶ日におけるみかん栽培の功績を語り継ぎ、将来ますます発展させていく誓いが述べられる。

イ.三ヶ日みかんに関する普及啓発

三ヶ日みかんに関する普及啓発の取組は、昭和 30 年代から、「ミカン娘」による三ヶ日みかん撮影会や駅ホームでの立売りなど直接宣伝活動が町観光協会と農協が主体となって行われた。特に撮影会は、みかん畑から浜名湖(猪鼻湖)を臨む素晴らしい景観と相まって、町内外のアマチュアカメラマンが押しかけ大変な盛況となった。「ミカン娘」は、地元の青年団から６人が選ばれ、任期は１年としたが、大規模なキャラバン隊結成時には、町役場や農協の若手女性職員が駆り出されるなど、町をあげての取組となっていった。

⑧　昭和38年12月15日　広報みつかび　第109号

三ヶ日みかん祭り実施計画書

事業主体　三ヶ日町・三ヶ日町農業協同組合・三ヶ日町観光協会・中部日本新聞社

行事計画　(12日間)

実施予定日	行事	摘要
12月1日(雨天の場合5日)	みかん撮影大会	モデル　みかん娘　4名 会場　三ヶ日母樹園 〃　摘果場
1月9日	特産物品評会	特産物搬入審査 写真作品展示
1月10～11日	特産物品評会 写真展示会	会場　農協
1月11日	慰安パラダイス (生産者招待) 飛行機宣伝	西部中学校体育館 農産物写真作品　表彰式　午前10時 慰安会　午后1時30分 祝賀宣伝飛行　中学校上空　午前9時50分 (メッセージ投下) 岐阜～浜松間宣伝ビラ20万枚中日機による
1月12～13日	キャラバン隊派遣	名古屋市、岐阜市内中日新聞宣伝カー使用 みかん姫10名の三ヶ日音頭の被露宣伝用みかんの贈呈
1月14～19日	柑橘類展示会 写真作品展 みかん即売会	名古屋市　松坂屋　撮影大会作品 みかん娘による

キャラバン隊派遣し

三ヶ日みかんの宣伝を

本町の特産であるみかんを広く県外に宣伝すべく例年その事業は進められて居りますが本年は去る十二月一日の撮影会をはじめとして来る一月九日より開かれる数々の多様な行事は三ヶ日みかんを広く紹介宣伝するを目的として行われます。なお本年は特に中部日本新聞社の共催を得大々的に飛行機宣伝とみかん娘のキャラバン隊にて遠く名古屋市、岐阜市内を紹介宣伝することになりました。

かんきつ

図2-8-55 広報みっかび(昭和 38 年(1964)12 月 15 日)

昭和39年(1964)には、三ヶ日みかんの普及啓発・宣伝活動を行うため、「第１回三ヶ日ミカン祭り」が開催された。『広報みっかび(第109号)』(昭和38年(1963)12月15日発行)で開催の告知が掲載され、『広報みっかび(第111号)』(昭和39年(1964)２月15日発行)に「三ヶ日みかんまつり　多彩な行事終る」の見出しで２ページにわたり掲載されている。現在でも農協祭として、毎年１月に町内外から多くの来場者を集め盛大に行われている。青島みかんのつかみ取りほか、みかんサブレやみかんようかんなどのみかんフードも出品されるなど、三ヶ日みかんを見て、触れて、食することができる場となっており、地域をあげて三ヶ日みかんのＰＲを行っている。

図2-8-56　農協祭(品評会)

図2-8-57　農協祭(青島みかんつかみ取り)

また、三ヶ日みかんの栽培・出荷の歴史を記録し普及啓発する事業は、戦前から町全域で行われている。昭和７年(1932)三ヶ日町農会発行『三ヶ日町の柑橘』、昭和43年(1968)三ヶ日町農業協同組合柑橘部発行『三ヶ日ミカンの由来と販売の移り変わり』のほか、農協の合併周年記念誌『三ヶ日町農協史　協同活動 30 年の軌跡』(平成４年(1992))、出荷組合の設立周年記念誌『三ヶ日町柑橘出荷組合50周年記念史』(平成21年(2009))など、節目の年には必ず史誌が発刊され、三ヶ日みかんの歴史と生産・販売などに尽力した人々の記録が刻まれるとともに、町内外へ発信することで三ヶ日みかんブランドの魅力向上に大きく寄与している。

さらに、昭和26年(1951)建築の「旧三ヶ日小学校大福寺分教場」を活用した「みかんの里資料館」では、三ヶ日みかんの歴史・文化を発信する取組を行っている。資料館の展示・運営は、地元の郷土史研究団体「三ヶ日町郷土を語る会」をはじめ、三ヶ日みかんに関係する地域の個人・団体が関わっている。みかんを中心とした農業・郷土史の展示解説を行うほか、三ヶ日みかん発祥の地や三ヶ日みかんに関係する記念碑などを巡る学習会(ふるさと文化財ウォッチング)を開催しており、次世代に三ヶ日みかんの歴史を周知するとともに、みかん栽培に尽力した先人の偉業を顕彰している。

図2-8-58 みかんの里資料館 展示室

図2-8-59 みかんの里資料館 体験学習

三ヶ日町がみかんの里であることを周知するものとしては、昭和60年代に鉄道駅(天竜浜名湖線東都筑駅前(国道362号都筑地内))や猪鼻湖(国道301号下尾奈地内)沿いの観光農園に隣接して、みかん型観光トイレが設置されている。三ヶ日町内の幹線道路を通る際のアイストップとなっているとともに、フォトスポットとして親しまれている。下尾奈地内のトイレについては地元有志により管理されている。

図2-8-60 みかん型観光トイレ(下尾奈)

図2-8-61 みかん型観光トイレ(都筑)

このほか、三ヶ日みかんは、毎年11月に伊勢神宮で開かれる新穀感謝祭に、箱詰めされた100キログラムが献納される。この新穀感謝祭に先駆けて、平成9年(1997)からは、毎年11月中旬に三ヶ日みかん献納祭が行われている。浜名惣社神明宮において、出荷組合長など多くの関係者が参加し、宮司の祝詞奏上、出席者の玉串奉奠により、三ヶ日みかんの産地発展を祈願する。

図2-8-62 三ヶ日みかん献納祭

(5)まとめ

浜名湖(猪鼻湖)を臨む三ヶ日みかんのみかん畑では、年間を通して燦々と陽光が降り注ぎ、秋には暖かな日の色に染まった果実を実らせる。江戸時代中期に伝えられたみかんは、秩父中古生層の三ヶ日の土壌に根を張り、近代以降、先達の必死の努力、果てしない苦闘、限りない挑戦を経て、現在のみかん畑景観が形成された。その積極果敢な進取の気風は現在に受け継がれ、その顕彰とともに品質向上のための取組が今に続いており、みかん生産地としての三ヶ日ブランドがより素晴らしいものとなるよう邁進している。浜名湖岸の傾斜地に営まれているみかん畑は、防風林と石垣に守られた畑地のほか、域内に点在する集落、湖畔の入江や背後の樹林など周囲の自然環境が一体となった特徴的な農村景観を形成している。こうした良好な農村景観を形成しているみかん畑とみかん栽培に関わる活動は、将来にわたって大切に維持し、向上させていきたい歴史的風致である。

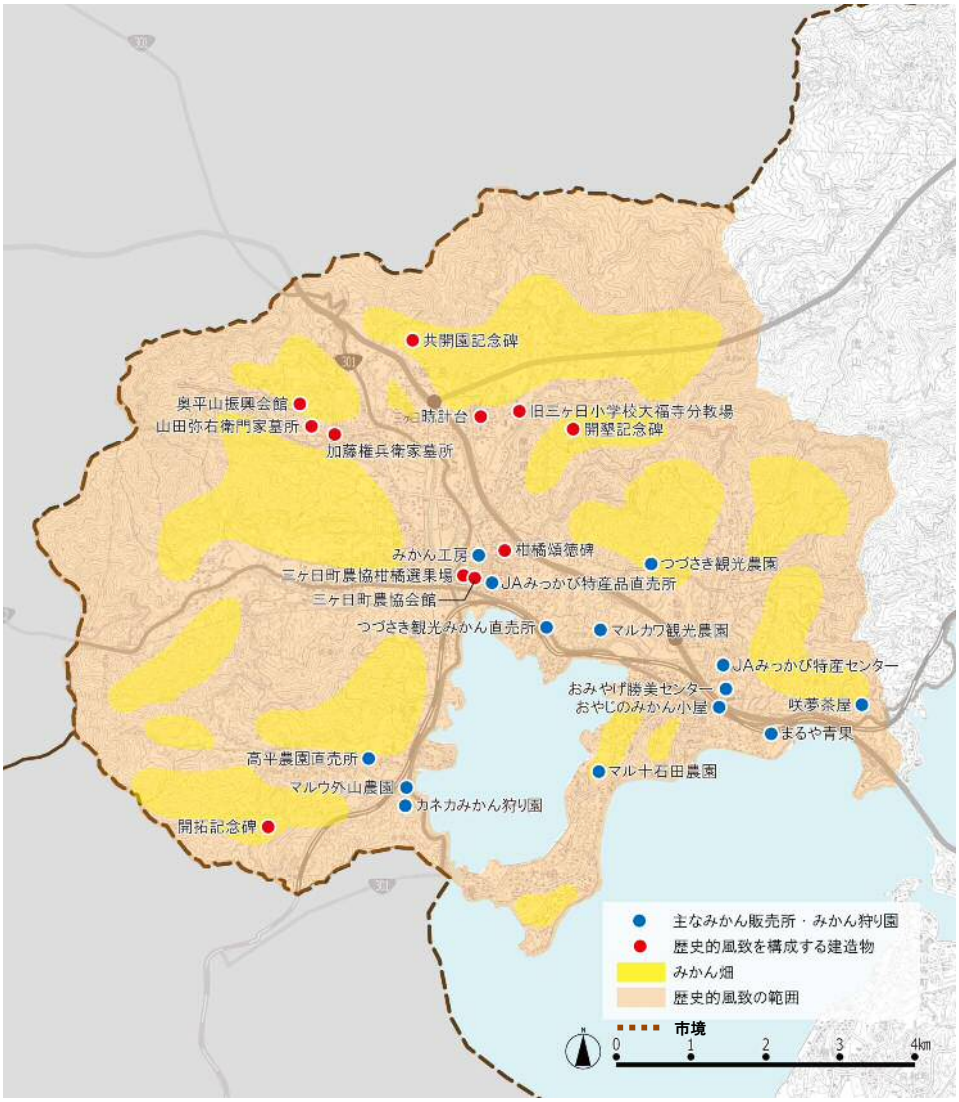

図2-8-63 歴史的風致の範囲

ちょっといっぷく コラム

三ヶ日みかんを使った和菓子の製造・販売

三ヶ日町では、特産の「三ヶ日みかん」を使った菓子が町内の和菓子店で製造・販売されている。

明治18年(1885)創業の入河屋では「みかん最中」を創作し、昭和29年(1954)から販売している。みかんの断面をかたどった外観で、最中の種(皮)と中に入れる餡(みかん餡)に三ヶ日みかんを使っている。冬にシーズンを迎える三ヶ日みかんを、一年を通して菓子という形に変えて提供したいという思いから生まれたものである。

図2-8-64 みかん最中

昭和17年(1942)創業の三ヶ日製菓では、戦後まもなくみかんの形をした最中「みかんの里」を創作し販売を開始している。丸ごと絞ったみかんピューレを原料の一部に混ぜ合わせるなど、三ヶ日みかんを使った餡を詰めている。このほか、厳選した三ヶ日みかん(早生)を丸ごと白餡と羽二重餅で全体を包んだ「まるごとみかん大福」を製造・販売しているほか、地元小学校などへの「出張みかん大福教室」やみかん狩り後に収穫したみかんを大福にする「みかん大福つくり体験」など、三ヶ日みかんを使った手作り和菓子教室も行っている。みかんの収穫から製品になるまでを自分の手で作るという、三ヶ日ならではの体験を提供している。

図2-8-65 みかんの里

図2-8-66 まるごとみかん大福

山田弥右衛門が当地でみかん栽培をはじめてから約300年の間、先人から引き継ぐ進取の気風を発揮し、農家と和菓子店という異なる分野の地域内連携が生まれるなど、三ヶ日みかんに関わる地域住民が自律的に過去を振り返り、現在を見つめ、未来を一緒に考えることで新たな時代を切り開いている。

ちょっといっぷく
コラム

三ヶ日町アクティブエイジング研究

平成 15 年(2003)、行政(旧引佐郡三ヶ日町)、研究機関(農研機構)、大学(浜松医科大学)の共同研究として、みかんと生活習慣病との関連を明らかにする「三ヶ日町研究」が開始され、平成 25 年(2013)まで疫学調査が行われた。

この研究では、みかんを摂取して血中のβ－クリプトキサンチン濃度を高く保つことで、骨密度低下、糖尿病、肝機能異常、脂質異常、動脈硬化等の生活習慣病が起こりにくいことが明らかになった。(β－クリプトキサンチンは、柑橘類特有のオレンジ色の色素成分。強い抗酸化作用を持っている。)平成 27 年(2015)、この成果に基づき「三ヶ日みかん」は生鮮食品で初の機能性表示食品として届出された(届出番号：A79)。

令和２年(2020)には、みかんと健康長寿との関連を明らかにすることを目的に「三ヶ日町アクティブエイジング研究」が開始され、令和９年(2027)まで追跡調査が行われる。本研究も行政(浜松市)と大学(浜松医科大学、同志社女子大学)の協働によるもので、健康長寿の推進に関わる新しい科学的エビデンスが生まれ、市民の健康保持増進に還元されることが期待されている。

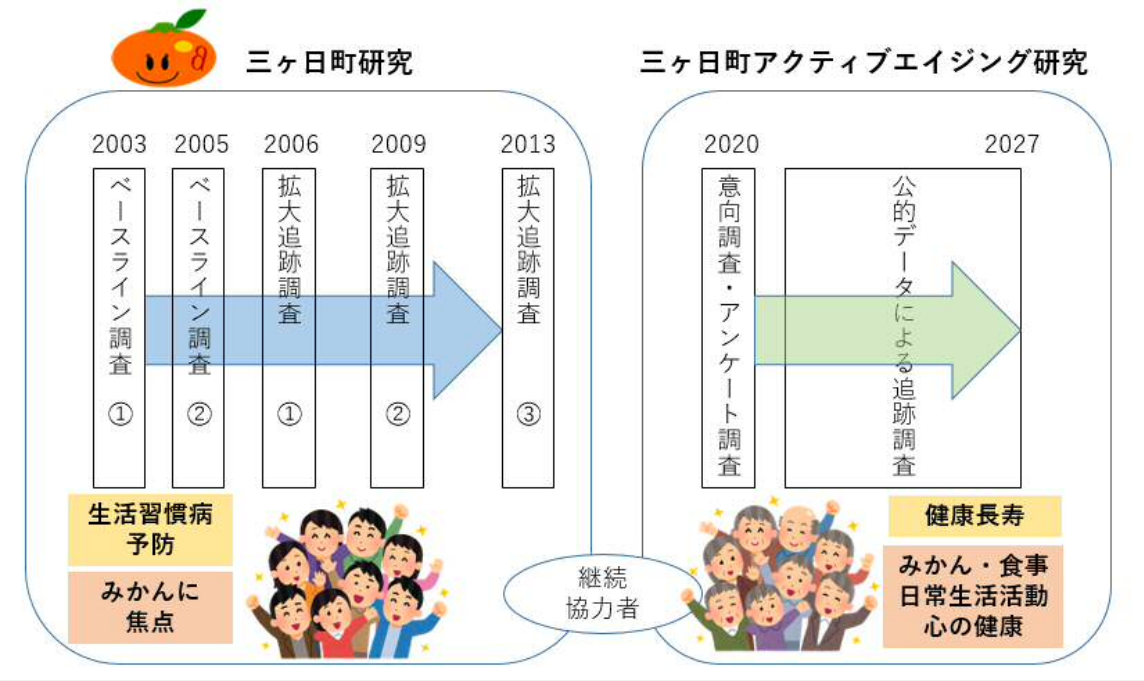

図2-8-67 三ヶ日町研究と三ヶ日町アクティブエイジング研究